例題
2-4

心情・表現説明型設問の解答実践

島木健作『バナナの皮』（大阪大）

時間
30分

次の文章は、島木健作の小説『バナナの皮』（一九三五年発表）の一部である。五月末のある日、上野駅から汽車に乗ろうとしていた「私」は、護送されている囚人を見かける。客車に乗りこむと、「私」と向かい合った席にその囚人が役人（看守）と共にやってくる。これを読んで後の問いに答えよ。なお、本文は一部改変したところがある。

囚人は窓ぎわに座り、役人はその横に座ったから、私と囚人とは膝をつきあわすほどにして顔を合せたわけである。彼は座ると同時に、編笠をとり、朝の光りにみちた窓外に向いてまぶしそうに目をまたたいた。さわやかな風に面を吹かれ、着ものの上からそれとわかるほどに胸をふくらませ、また大きく息を吐き出すのだった。私はそういう境遇にある人にたいする特別な見方をもってではなく、普通の人間にたいするように彼の顔を正視した。まだ若い青年だった。はじめてそのうしろ姿を一瞥したとき、しっかりした骨組にもかかわらず、肩のあたりの線に、どこかまだ一人前になりきらぬ、初々しいものを見たのであるが、それをそのまま裏書するような実際の彼の若さであった。皮膚は荒れ、このような生活にあるものに特有な、澱んだ汚水のような色艶だったが、光り失わぬ黒く澄んだ眼は、*検査をすぎてまだ間のない頃のものをおもわせた。かすかに口を開き、そのときはもう動き出した汽車の窓外に、刻一刻かわって行く風物にうっとりみとれているさまは、あどけないものをさえ含んでいる。ふいに彼は小刻みに膝をひょいひょいと動かしはじめた。今の彼としてほかには表現し得ない(1)心の喜びなのであろう。太く冷たい鉄の手錠のしかと喰い込んでいる双の手首が、その膝の動きにつれて無心にかすかにふるえている。……

気がついてみると、しかし、彼の存在に心をとられているのは決して私一人ではなかった。この車内にある大半のものがそうであったといえる。彼がはいって来た当座、おびえたように身をすくめたものたちも、自分たちの座席から遠くはなれた今の彼を見るときは、安堵の胸をなでおろすと同時に、好奇心が頭をもちあげて来たようである。用もないのにぶらぶら私たちのそば近くあるいて来、じろじろと彼を見て、それから帰って行くものがあった。多くはただ物珍しそうな、罪のない眼いろであったが、なかにははげしい憎悪に燃えて、生き身の皮まではぎ取りそうな、無慈悲な眼つきで見据えるものもあった。私たちとは別の側に、はすかいに席をしめていた、四十歳前後の親方ふうの男など、そのうちの主な一人であった。おそらくは土木*請負師などのたぐいであろう、大兵肥満の洋服姿で、赤皮の編上げをはき、ズボンの裾は靴下のなかにおしこんで、靴下止めを上からしていた。右手に一つ、左手に二つ金の指輪をはめ、はっはっと大口あけてわらう時の口のなかもお神楽の獅子にそっくりなら、胸間にぶら下げている金の鎖の太さもなみなみのものとはおもわれぬ。彼は六つか七つぐらいの男の児をひとり連れていた。子供は父親の膝の上にいて、甘えている。かの囚人の方にちらりと眼をくれ、子供らしく誇張した表情で、おびえたように父親の胸に顔をうずめ、足をばたばたさせるのであった。父親は幅広く厚い胸でがっしりと子供をささえ、あたりのもののふりむいてみるほどの大ごえをあげてわらうのである。

「こわくない、こわくない、何がこわいもんかい、お父さんがついてらあな。」

子供は父親の首に両手をまきつけて、耳もとに口をよせ、ひそひそとなにかささやいた。

「うん、うん、わるいことさえせなんだら何もこわいこたアありゃしない。わるいことをすりゃな、おまわりさんがしばってつれてって、あんな着ものを着にゃならんぞ。何？　どんなわるいこと？　はっはっ、そりゃ坊や、いろいろあらあな。どろぼう、火つけ、人ごろし……」

私はおもわずはっとして、なにか、自分に直接関することででもあるように、顔いろをかえた。とっさの間、私は目の前のかの囚人の顔を正視する勇気を失った。しかし、私はおもい切って見たのである。「どろぼう、火つけ、人ごろし……」のこえがひびいたとき、今まで窓の外ばかり見ていたわかものは、ぎくりとしたふうで、こえのする方をちらりと見た。すぐにもとへ顔をかえしたが、一瞬のうちにその顔は、今までとはまるでべつなものになってしまっていた。今までのあどけない、子供らしさは影を消して、急にいくつか年をとった、萎んだものになっていた。暗く陰惨な、典型的な囚人のそれに変っていたのである。心を鎮めようとし、依然、窓の外を見ているが、手の指先は、それとあきらかに見えるほど、ぶるぶるふるえているのだった。……

私も亦、(2)読もうとひろげた新聞を持つ手のふるえのどうにもとどまらぬ感情の荒立ちをおぼえたのである。私はかの田舎紳士をにくんだ。その肥えふとった胴体を踏みにじってやりたい切ない衝動に身をおいた。たった一つ、――若い囚人の顔に今が今までうかんでいた、ちょうどこの五月の季節のように、明るく朗らかな表情を、一瞬のうちに萎えしぼませてしまった、――はげしい毒素のような、彼のその一と言のためにである。私はこの年若い囚人が、何の罪で、何年の刑期で、どこへ送られて行くかを知らぬ。しかしながら私は、ついさっきまで彼の顔にうかんでいたような表情が、このような生活にあるものの上に、容易に見得るものではないことをよく知っている。それは一年に一度か、二年に一度、何かの折にひょいとやってくる程度のものである。その生活にあるあいだじゅう、何年居ろうと、ついにそういうことのない不幸なものもある。囚われている人間であることを、全く忘れている瞬間でないならば、そういう表情が彼の上にあらわれるということはないのである。

どのくらいか時間がたった。側につきそっていた役人は、その時、時間を見、囚人をうながし立たしめた。ここにあってもちゃんと時間をきめてするらしい不浄場へ行く時が来たのである。囚人は気のすすまぬふうに立ってあるきだした。向うはしの不浄場の前で、手錠の鍵をはずしてもらい、そこにあるあいだ、役人はその前に立って待つのであった。用をすました囚人は、ふたたび手錠に腰縄姿でこっちへあるいて来た。車内の人々は一せいに彼に鋭い視線を放った。(3)幾十の射るような視線に裸にされ、何よりもさきに蒙った心の痛手があって、若ものはおどおどし、足もともどこかたよりなげだった。

さきの請負師ふうの田舎紳士と、子供は、そのときはもう、一向そしらぬふうに、バスケットを下し、果物やら、菓子やらにさかんにパクついていた。ふりかえって、近づいて来るわかものをじろりと見た男は、今喰い終ったバナナの皮を、通り路にすてたのである。すてられたバナナの皮は、ちょうど通路のまんなかにおちた。紳士はなんの気もなく、ただ無造作にすてたのかも知れぬ。しかし、横をむいてにやりとわらった顔の卑しさにはなにかを期待して心にほくそ笑んでいるところがあり、見ていた私は、おもわずはっと緊張した。何か起りそうな予感にわれ知らず腰をうかせていた。すると、その瞬間だった。ちょうどそこまで来た囚人が、地ひびきするほどの音を立ててのけさまにうしろにひっくりかえった。いうまでもなくバナナの皮に足をとられたのである。あわてて起き上ろうとし、ふたたび中途でひっくりかえった。両手の自由のきかぬ彼は三度四度と身もだえした。どっと、いろとりどりの笑声が、狭い車内にひびきわたった。

「馬鹿野郎！」

冷酷にののしって、看守の手が、帯にかかり、はじめてわかものは立上ることができたのである。

笑声はなおもしばらくつづいていた。しおれたわかものが、席へもどって来てのちも、くっくっと含み笑う、若い女などの、世にこれほどに冷酷なものも少ないであろう笑いがきこえていた。が――間もなく、それらのこえはぴたりとやんでしまった。かつてない静けさに車内はしーんとひそまりかえった。

若いかの囚人の口をもれて、すすり泣きのこえがきこえてきたのである。喰いしばった歯のすきまから、それはもれて来た。はじめはおさえにおさえた低い音だったが、ついにそれはおさえがたくどっとあふれた。子供のような嗚咽のこえがしだいに高くなって行くのであった。涙のしずくが頬をつたわった。ふとみる、彼の頭の耳に近いあたりには、倒れた拍子に座席のかどにうちつけたものだろう、髪の毛の上に血さえにじんでいる。手錠の喰いこんだ手首は、起き上ろうともだえた時に傷ついたものだろう、いたいたしく皮がむけ、ここにも血しおがふきでている。……

汽車は走り、車輪のひびきはごうごうと今しも鉄橋を越えた。そのひびきのあいまに、すすり泣きのこえはなおもきこえる。(4)厳粛なものに打たれて車内にはコトリとの音もしなかった。私は硬ばった真青な顔をして、彼ひとり今なお平然たるかの肥大漢の横顔を喰い入るように見すえていた。富んで無智なるものの、冷酷さ、残忍さを見ること、今までに私は必ずしも少なしとはしない。しかしこの時ほどにはげしいいきどおりに身を灼いたことはいまだかつてなかったのである。

（語注）＊検査＝二十歳に達した成年男子が義務づけられていた徴兵検査。
＊請負師＝下請けの職人たちを束ねる役目を果たす仕事。

問1　傍線部（1）「心の喜び」とあるが、「私」は若者がどのような「喜び」を感じていると考えているのか、わかりやすく説明せよ。
（編集部注：解答欄は173ミリ×36ミリ）

問2　傍線部（2）「読もうとひろげた新聞を持つ手のふるえのどうにもとどまらぬ感情の荒立ちをおぼえた」とあるが、なぜこのように「私」は感じたのか、その理由をくわしく説明せよ。
（編集部注：解答欄は173ミリ×36ミリ）

問3　傍線部（3）「幾十の射るような視線に裸にされ」とあるが、このような表現にはどのような効果があると考えられるか、説明せよ。
（編集部注：解答欄は173ミリ×36ミリ）

問4　傍線部（4）「厳粛なものに打たれて車内にはコトリとの音もしなかった」とあるが、「私」は多くの乗客たちの心理をどのように考えているのか、「厳粛なもの」という表現に留意して説明せよ。
（編集部注：解答欄は173ミリ×36ミリ）

問1

問2

問3

問4